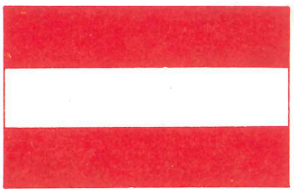
高知県立坂本龍馬記念館だより

飛騰

創刊号



土佐海援隊旗

発刊にあたって

館長　小　椋　克　己

青年グループの募金活動と、それに応えたアメリカを含む全国の方々の善意で開館にこぎつけた坂本龍馬記念館は、県に寄贈され「県立」という肩書きをつけて、龍馬ゆかりの昨年11月15日オープンしました。

早いものでもう4か月。開館当初のきりきり舞いも、やっと少しずつ落ち着いてきて、この辺でひとつ皆様へご挨拶しようということになりました。館だより「飛騰」の創刊です。

「飛騰」というのは、当館の下元学芸専門員がいろいろ拾い出してくれた中から決まったもので、下元学芸専門員によれば、龍馬と気脈を通じていた郷士、樋口真吉の手記の文久元年10月11日に出てくる「坂龍飛騰」から取ったもの。この日龍馬は、剣術修業のため讃岐へ出立しますが、その後長州へも足を伸ばしているとか。

すでに藩内での上士下士のせめぎあいに嫌気ざし「土佐にあだたぬ男」となりつつあったのでしょうか。樋口もその心のうちを見てとって「坂龍飛騰」と書いたのでしょう。しかも、その日の記述はその一行だけですから、印象の強さも裏づけています。

この題名には、私たち職員一同の気持ちと目標が込められていますが、現在の状況はまだ「ヒトウ」どころか「ソクトウ(足踏み)」くらいのところですので、皆様のお扶けを頂きながら、何とか「飛騰」したいと思います。

坂本龍馬記念館について私は、そのイメージと機能から「龍馬への入り口」と表現していますが、館だよりの役目はさしずめ「龍馬への道しるべ」ということになりましょうか。

記念館からの情報発信のほか、私どもへのお便り「拝啓龍馬殿」からも抄録して、いわゆる「双方向性」を持たせ、さらに「読み物」「ご意見」「情報」を集積する「広場性」にも期待しています。どうぞご声援下さい。

開　館　に　よ　せ　て

―飛翔―
新しい時代の高知県の心を求めて！

高知県知事

日本の歴史の中で、特にその激動期において、高知県の人々は進取の気風で時代の心を発信し、行動してきたように思います。

そして今、世界は新しい構造への変化の時を迎え、国内においても地方の復権が求められています。歴史的伝統と自然に恵まれた高知県は、このような国際化と地方の時代に、新しいパラダイムを生みだす可能性を持っております。

幕末の日本は、西洋文明との出合いの時代でありました。その思想的、政治的混乱の中で坂本龍馬の示した西洋的民主主義への受容力と行動力は、その時代の限界を遙かに越えて、現代的な光彩を帯びています。

特に33年の短い生涯の中に現れた、彼の人間性の加速度的な成長のエネルギーは、私達に今なお無限の可能性を感じさせます。

坂本龍馬記念館は「龍馬」を過去に固定させてはいません。むしろ未来に向かって投げかけているのです。明るく開放的な建築デザイン、外光と周囲の自然を取りこんだ展示構成、桂浜から海と空に向かって進む動線など記念館の常識を覆すような構成は、過去にとらわれない龍馬の自由性と未来への可能性を表現しようとしています。

又ここでは結論としての確定的な龍馬の人間像は示されてはおりません。多様な魅力を持つ龍馬を多様なままに表現しています。館内を巡ることによってそれぞれの人々が自分の龍馬像をイメージして海と空に向かって飛びたつ、そのような「龍馬体験」を期待しています。

記念館建設運動に参加した土佐の青年達の情熱と、このような全国の龍馬ファンへのメッセージがこめられた坂本龍馬記念館を、皆様とともに大切に育てていきたいと思います。

「市民メセナのメッカ」としてテイクオフ

元龍馬生誕150年記念事業
実行委員長　澤村拓夫

今、企業の中で文化や芸術活動に対する支援を意味するメセナに注目し、積極的な取り組みを始めたところが増えてきました。これは利益重視から広く地域や市民に利益還元を計ろうとする経営姿勢の表われでもあります。

今度開館の運びとなりました龍馬記念館は、少し形態の異なったものですが、「市民メセナ」ともいうべき、文字通り数多くの市民浄財で龍馬の功績を称え、その足跡を後世に伝え続けようという願いをこめて、完成されたものです。

私はこの運動を推進してきました一人ですが、この記念館の性格づけとして３つの基本構想を提案しました。それは歴史的機能であり、教育的機能であり、文化交流的機能であります。とりわけ最後の文化交流的機能の充実に、最も期待するものでありまして、全国各地から龍馬を慕い求めて訪れる人々が、「自の龍馬観」を確認し、「他の龍馬観」に触れ合うことによって、自己革新や啓発の導火線になってもらいたいと願っているからであります。

ともすると激変する時の流れに唯々埋没しかねない時代にあって、自分の人生観をしっかりと持ちつつ、広い視野と大いなるロマンを求める若者へと変身していくような「メッカ」として、その使命が果たせれば何とすばらしいことではないでしょうか。

その意味でもこの記念館は既成概念にとらわれることなく、自由で型破りな運営と発想を心からご期待いたします。それこそが龍馬の精神を活かしつつ、時代を先取りしていくことができると信じます。

開　館　に　よ　せ　て

開館に寄せて―龍馬との出会い―

高知県立図書館　広谷喜十郎

貴館の内容をよく承知していないので、全国に数多くいる龍馬ファンとおつき合いしている立場から、若干のお願いをしておきたい。

龍馬ファンは高知へ来て、まずどこへ行けば龍馬の直筆の書簡を見ることができるかとの質問をされる。どこへ行けば直筆の書や関係史料があると、すぐに返事ができるようにしなければならない。そして年一回は「坂本龍馬展」を行い、県下にある龍馬のなまの史料を一堂に集めて展示してほしい。次に「龍馬の追体験コース」を設定して、コースごとのマップを用意しておくべきである。例えば、柴巻にある田中家は昔のままの家であり、龍馬が使用していた碁盤を直接に手に触れることができるし、近くにある八畳岩からの展望はすばらしく、龍馬と同じ気持ちを味わうことができる。

来館者にどんな物が用意されているか知らないが、早急に『坂本龍馬読本』を作成して、子供達に正しく龍馬像を伝えなければならない。県外から来た人に、自分の住む町にどんな先人がいたかを語れるようになってもらいたいものである。龍馬だけでなく、幕末に数多くいた志士（支えた女性達も）を機会あるごとに一人でも多く、下の展示室で史料（複製でよい）を利用して紹介する必要がある。

その掘り起こし作業を市町村にいる研究家と協力しながら、将来は『土佐幕末勤王運動史』をまとめてほしいものである。そうなっていけば、県全体の地域起こしにつながる筈であり、坂本龍馬記念館が名実ともに県民の記念館になることであろう。

常に進取の風を

青山文庫学芸員　松岡　司

博物館の生命は「真」の展示にありました。美の重視から偽物との妥協を許さず、唯一無二の真をもって品格のある展示を構成してゆくのです。見る人は真のみがもつ幽玄・美妙・凄恨に感動し、圧倒され、見せる側もまたそれを意識してきたのです。これが、昨今地方に流布していますレプリカ・模型重視のスタイルに変ってきましたのは、教材となれば可とする教育主義によるもので、文化庁の主導する次善の策ともいえるものです。20年位前からでしょうか。しかし、いくら似せても偽物は偽物で、ましてや一見してすぐレプリカとわかるようでは、いかにも興ざめしてしまいます。

龍馬記念館の常設展示は既存の方法を捨て、現代的な映像メディアを重視し、大胆かつ斬新な舞台演出を心がけた、今までにない新しい展示法を試みています。見る人に新鮮なイメージをあたえているでしょう。とはいえこれ程映像メディアが多様化かつ精密になり、しかもビデオが一般に普及した今日においては、家庭に居ながらそれ以上の映像が選択できる時代になろうとしています。龍馬記念館ははや時勢に先んじ、一歩先を考えた更なる新機軸を探究すべきでしょう。眼前に広がる青い空と青い海をも舞台と考え、常に進取の風を失うことなく飛躍すること。これが、大空に羽ばたこうとする館の設計者高橋さんの心にかない、そして何よりも龍馬の偉大さを後世に伝えんとする、高知県青年の心意気にこたえることでしょう。いささか展示に関与した者として、館の希望に満ちた若さあふれる飛翔を願ってやみません。

開館までの経緯

副館長　森本源一郎

平成３年10月１日　　開館まで１か月半となったこの日、解説補助員５名の採用辞令が文化財団専務理事から交付されました。事務補助員の採用は後日となりましたが、これによって漸く開設準備室の陣容が整ってきたのであります。

９月６日に室長と次長、翌７日には学芸専門員２名の発令によって次第に形は整いつつありましたが、記念館の顔ともいえる解説補助員の人選にはいささか苦労があっただけに、辞令を受ける若い明るい顔をまのあたりにして、安堵の胸をなでおろしたことでした。

９名の職員はいずれもこの種施設に勤務の経験はなく、いわば全くの素人集団である準備室が、無事11月15日を迎えることができたのは、歴史民俗資料館の施設、機器の使用のみならず、先輩施設としての経験に基づく全面的なバックアップがあったればこそであります。

桂浜の現場では、展示工事や外構工事が急ピッチで進んでおり、完工間近であることを確認しておりましたが、この記念館の場合、建築、展示工事は実行委員会が発注し、完成後県に寄付するというその生立ちにおいて、他の県立施設と大きく異なる点があります。従って準備室としてはその面の心配は不要であったものの、逆に携わっていないことが、使い勝手やメンテナンスへの対応に苦慮しなければならない結果となりました。

入館者の動線はどうなのか、車椅子の場合、また雨天の場合どう変るのか、それによる受付デスクや券売機の配置、不整形な事務室への備品のサイズ等々、設計者の意図を踏まえつつ主管課との打ち合わせが行われ、その都度結論は見出すものの、翌日にはこれが最善なのか、手抜かりはないか、との思いが去来したことでありました。

メンテナンスにおける最大の問題はハーフミラーガラスの清掃でした。２度の台風による強風で潮が付着し、すりガラス状となっていましたが、地上から９～16ｍの高さでは当然のことながらプロでなければ手に負えない作業であります。入札の準備は進めつつも、果たして落札契約まで順調に事が運ぶのか、現地調査のたびにつきまとう不安材料でした。

年末年始の７日間を除き年中無休という条例案のもとでの職員のローテーションづくりも苦しい作業の一つでした。毎日一定人員の確保は、人員、勤務条件等から不可能であり、結果はバラツキ覚悟のうえの背水の陣といえるローテーションとなっております。

10月23日にポスター、チラシの納入があり配布作業に入りました。館の概要を案内するパンフレットは９月上旬に仕上がり、主要機関、施設等に送付済みであり、これらによってある程度のＰＲはできたものの、勿論万全とはいえません。有難かったのはマスコミの取り上げでありました。その反響は旅行業者、宿泊施設、そして案内所からの問い合わせとなって現われ、その対応に追われる毎日となりました。

坂本龍馬の知名度の高さ、そして記念館への期待の大きさを、改めて感じたことでありました。

平成３年11月１日　　この日から記念館での執務となりました。

展示工事は追い込みに入っており、備品の搬入や機器の取付等で騒然とし、館全体が埃っぽい状態でありました。

懸案であった事務補助員も本日から出勤となり、漸くにして10名体制が整いました。

このようななかで清掃業務入札のための現場説明を行い、10社の方々に一巡してもらいました。外回りのガラス面積は1,130㎡、「屋上からのゴンドラによる作業は危険」との意見は各社共通しており、この話から果たして落札者がでるだろうかとの心配は、11月７日の入札で現実のものとなりました。３回の入札でも彼我の差は大きく不落でした。

館の命ともいえるガラスの清掃なしでは開館できません。何とか引き受けてもらい、突貫作業で完了したのが開館２日前でした。無理な注文をこなしてもらった清掃会社には、頭が下がる思いであります。

更に、警備（昼間常駐）委託についても、無理をお願いしております。

黒潮が美しく映えるガラスを見あげながら、大きなハードルをやっとクリアーできた、これも龍馬の余徳であろうか、と考えたことでした。

11月11日、日常清掃が開始され、館内は目に見えて美しくなり、報道機関への公開も無事終了、資料閲覧室の図書、折込パンフレットも入荷しました。

翌12日には龍馬の蠟人形、純金鰹やサンゴの据付けがあり、資料展示室の展示作業も略終了し、次のセレモニーである13日の実行委員会主催内覧会、14日の神事、内覧、そして翌15日のオープンへと全ての準備が整いました。

13日、入館券とテスト用紙の納品をまって券売機３台のテストを行いました。券売機は３台とも個人用を設置しましたが、当初計画の個人用２、団体用１を変更したことは、利用頻度予測から、そして入館者の動線からも適切であったといえます。テストの結果は上々、常駐警備もこの日から開始、夜間の機械警備と併せてその面の手筈も万全となりました。

13日からの一連のセレモニーに、実行委員会、県そして文化財団から大勢の応援をいただきました。記念館の無事誕生を願う熱気を感じたことでありました。

15日９時、華やかなテープカットに続いて多くの入館者を迎えました。真新しいユニフォームの解説補助員はいささか緊張気味ではありましたが、笑顔の応対は男性的イメージの館に安らぎを醸しだしており、スムーズな人の流れに、まずは安堵しそして自信を得たことでした。

開設準備室の10名はこの日から坂本龍馬記念館勤務となりました。多くの方々によろこんでもらえる記念館に……そのために何をなすべきかを常に問い、実行することが私共の任務となります。

開館を祝う龍馬太鼓の勇壮な響きが、紺碧の海に吸い込まれて行きます。館の誕生を告げる力強い産声に聞こえました。

生誕156年の今日から、県立坂本龍馬記念館の永い歴史が始まります。

入館状況

平成４・２・29現在（開館以来100日）

○総入館者数	48,418人
○最多入館　Ｈ４・１・３	2,552〃
○最少入館　Ｈ３・12・17	72〃
○１日の平均入館者数	484〃

○特色

- 正月の休みや11月の連休は、特に入館者が多く、年末は少ない。
- 高知自動車道大豊・川之江間の開通により、土・日曜日の入館者が、若干増加の傾向にある。

坂本龍馬記念館内のご案内

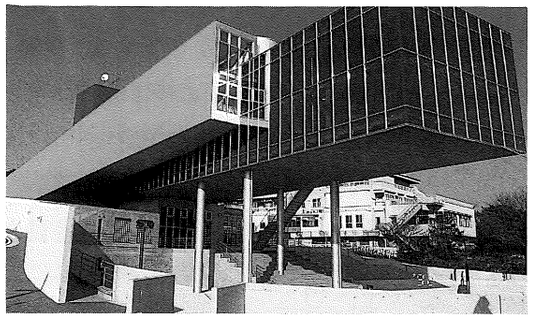
学芸専門員　岡　林　春　雄

高知県立坂本龍馬記念館は、1991年11月15日、多くの方々の善意と期待とを担ってオープンしました。

青い大海原に向かって、乗り出すように建てられているこの記念館には、二つの大きな特長があります。

一つは、建物についてであり、他の一つは、館内の展示物についてであります。

「躍動感のある象徴的な建物にしたかった」とする、設計者高橋晶子さんのこの建物にかける思い入れと情熱が随所に感じられ、坂本龍馬が夢見た広い世界へと誘われていくように思われます。



メイン展示室は、なだらかなスロープを上っていくと大きなガラスの箱とつながります。このガラスの箱、つまりメイン展示室は、斜張橋と同じ吊りロープ構造となっており、空中に浮かんだ大きな船を感じさせます。

又、メイン展示室は、坂本龍馬の生涯と人間像を、グラフィックパネルやレーザービデオディスクを駆使した、七つのステージでドラマティックに構成してあります。

すなわち、各ステージでは、それぞれテーマを設け、中心となる人物が、坂本龍馬の思想、行動や、時代的背景、エピソード等について語り、付随する展示物と合わせてその内容を補完するような形になっています。

「疾風のステージ」では、陸奥宗光、長岡謙吉、岩崎弥太郎、伊藤俊輔等、後に近代日本の建設のためいろいろな分野で活躍する海援隊士たちの目をかりて、「海援隊の商法」「船中八策の成立」に関わるエピソード等を、ビデオやガラスエッチング、グラフィックパネル等を用いて説明しています。

「葛藤のステージ」では、幕末の日本や世界の情勢について、様々な葛藤をもって生きる龍馬に対して、河田小龍は、ジョン万次郎を通じて得た、海外の事情についての知識を伝え、次第に世界への目を開いていく龍馬について語っています。

又、当時の地球儀の模型や、多面サイコロ、廻り灯籠等によって、幕末の時代背景を伝えています。

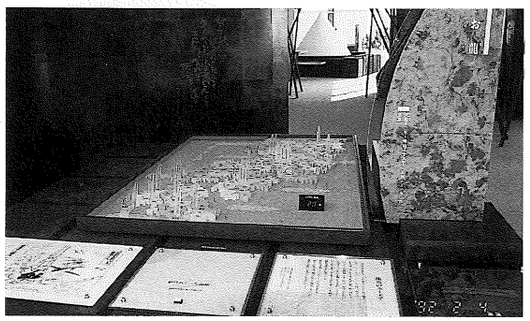
「土のステージ」では、武市半平太、那須信吾ら土佐勤王党の動き、龍馬の脱藩ルート等をビデオや立体模型、光ファイバーを用いた点灯装置等によって、その足跡をランプの残像で視覚的にわかりやすく表現しています。

そのほか、土佐を動かした人々の思想と身分との関係を、グラフィックパネルの上で示しています。

「諧謔のステージ」では、親しい人々にあてた龍馬の書簡の一節をいくつか紹介してあり、妻のお龍、姉の乙女、寺田屋のお登勢等、龍馬の私生活に深く関わった人々が、それぞれ、そのときそのときを語っています。

そのほか、本県出身の漫画家くろがねひろし氏による「勝　海舟と龍馬」「近江屋の龍馬さん」等４点の漫画の中でも、いろいろなつぶやきが描かれています。

又、年齢ディジタル表示板とストロボ点滅プログラムとを連動させ、龍馬の年齢が進むにつれて、土佐から福井、江戸、薩摩、長州、長崎、熊本、京都へとめまぐるしく行動を起こして活躍する龍馬の様子が、赤いランプで表示されていきます。



「苦悩のステージ」では、近江屋で中岡慎太郎とともに遭難したときの模様を、ドラマティックに表現したビデオや、瓦版風にビデオにまとめた「幕末事件帳」、錦絵風イラストで幕末事件年表等が展示されています。

「燭光のステージ」では、西郷隆盛、後藤象二郎、由利公正、大久保一翁等が、龍馬の人間像や、思い出についてガラスではさんだ文字パネルの上で、また、勝　海舟には、ビデオの中で語らせています。

そして、真っ白な円錐を配置し、抽象的な造形物によって、維新への燭光を表現しています。

最後の「空白のステージ」では、これまでに見てきた龍馬について、思い思いに、自分なりの龍馬像を形作り、お客様同士が語り合える場として設けられております。

陽光の輝く中に大きく開けた、そして龍馬も眺めたであろう太平洋に向かって、大いに龍馬の情熱とエネルギーを汲み取って下さることを願っております。

この後、中二階に上がって、再び海を展望したり、展示室のそれぞれのステージを、上から俯瞰しながら、屋上への螺旋階段を上ります。

屋上では、遠くから漂う、潮の香りや潮騒の音、沖を航行する船のエンジン音等を直接肌に感じながら、眺望をお楽しみ頂けます。

続いて、エレベーターで地下二階にあります資料展示室へ下りて頂きますと、幕末に活躍した、龍馬に関わった人々に関する資料が、パネルで紹介されている他、宮地佐一郎氏がご寄贈下さった、多くの書や掛け軸、坂本家の家系図及び坂本家との関係図等が展示されております。

敷き瓦の階段を上がりますと、そこは地下一階の資料閲覧室となっており、龍馬に関する図書コーナー、龍馬に関するビデオ視聴コーナー、来館記念スタンプコーナー、「拝啓龍馬殿」という寄せ書き記述コーナー、喫煙コーナー等があります。

ここまでが、記念館内の展示物等についてのご案内ですが、一息入れて頂き、南の広場へ出ますと、ここが「八策の広場」です。

藩船夕顔丸の船中で、龍馬の草案が後藤象二郎に示されたといわれる「船中八策」の原文が、一策ずつ、照明電球の入った八本のステンレスポールに、それぞれ書かれて立っています。

また、広場の南端には、高知南ロータリークラブ寄贈による、瓢箪型のアナレンマの影を映して時刻を表示する、くじら日時計があります。

この日時計を見た後、少し西寄りに移動して記念館の全体像を見て頂きますと、設計者が意図した、明るい太陽、青い空、広い海、そして樹木の緑の中に融和した、印象的なたたずまいを見ることができます。

龍馬への入り口として、さらに充実させていくうえで、是非、この記念館を、今後ともに可愛がって下さることを念願致しております。

龍　馬　脱　藩

学芸専門員　下　元　正　清

当館第３のステージには、坂本龍馬脱藩ルートを示す立体模型が置かれています。その立体模型の手前にあるボタンを押すと、高知城下から佐川、朽木峠、葉山、東津野、梼原、そして韮ケ峠に至る龍馬の歩いた道が、順に明るい電球で示される仕組みになっています。

文久２（1862）年３月24日の夜、龍馬は沢村惣之丞を同行して城下を抜け出し、見送りに来た河野万寿弥と朝倉で別れ、更に西へ向かいます。翌25日の夜は梼原の那須信吾宅で泊まり、26日は那須俊平・信吾の導きで宮野々関を抜け、国境970ｍの韮ケ峠に至ります。

従来、彼は宮野々関から九十九曲峠を経て伊予へ入ったという説が有力でしたが、最近、高松順蔵の文書が世に出たため、韮ケ峠経由が確定的になりました。

ここから肱川沿いの道を下り、大洲を経て長浜に至り、金兵衛宅で旅装を解きます。

以上史実を追って来ましたが、これだけでは人間の姿が見えません。歴史を作ったのも、歴史の流れに押し流されていったのも人間です。歴史とは壮大な人間のドラマです。したがってそこに生きる人間の心情に立ち入ることも必要ですが、それも史料に即したもので読み取れるものでなければなりません。

龍馬の脱藩を最も恐れていたのは坂本家の当主権平で、家族は勿論のこと親戚の者にまで、龍馬を厳重に見張ることや脱藩の手助けをしないことを要請していました。

脱藩とは藩に対する反逆を意味するので、それが実行されると直ちに城内から追手が差し向けられ、上意討ちされるのです。また家族の者も、とがめを受けることは避けられません。

その頃、柴田家を離縁されて帰っていた姉栄は、柴田家を離れる時に夫作右衛門から形見にもらった「吉行」の刀を、龍馬に渡したのです。栄としては、死を覚悟の上の行為でした。

そのため、明治３年に差し出した坂本家の家系図から、栄の名前が抹消されるという悲劇が生まれました。

権平は３月25日に龍馬脱藩のこと（行方不明）を、27日に権平所持の刀紛失のことを、それぞれ福岡家に報告し、福岡家では御用日記にその旨記録しています。

ところが坂本家に対する藩の措置については、何の史料も出てこないところを見ると、権平の必死の工作が効を奏したのかもしれません。

龍馬の脱藩については、周辺の者は予想されていたことで、「龍馬、遂にやったか。」と思ったことでしょう。武市半平太は龍馬を「土佐にはあだたぬ奴」と言い、「……飛潜誰か識る有らん。偏へに龍名に恥じず。」と詩を作っており、平井収二郎も京都にいる妹加尾に龍馬脱藩のことを告げ、「たとへ龍馬よりいかなる事を相談いたし候とも、決して承知致すべからず。」と忠告しています。

龍馬と惣之丞は船で長浜から上の関へ渡り、三田尻を経て４月１日に下関の白石正一郎宅へ到着しています。龍馬は家族への想いと今後の活動への期待や不安にさいなまれながら、維新の大業に向かって大きな流れを創り出したのです。

お客様の滞館時間の都合やその時の雰囲気によって、そこまで説明することはできませんが、一見あの無味乾燥の立体模型には、龍馬をはじめ多くの人々のドラマが秘められていることを、少しでも知ってもらえば幸いだと思います。

平成３年11月15日（高知）→

龍馬記念館

落成式典に300人

ジャンセン教授ら賛辞

記念講演やフォーラムも

高知市

高知市桂浜に十五日オープンする県立坂本龍馬記念館の落成式典と記念講演、フォーラムが十四日、高知市の城西館で行われた。米・プリンストン大学の龍馬研究者、マリウス・ジャンセン教授夫妻や建築家の磯崎新氏ら県内外から約三百人が出席。それぞれの立場から〝メモリアルホール〟の完成を祝福した。

県立坂本龍馬記念館落成

まず落成式典。中内知事が「さまざまな困難を克服し、みんなで作った龍馬館だ。これからは県立施設として運営するが、皆さんの意向を酌んで万全の運営を図りたい」とあいさつ。龍馬生誕百五十年記念事業実行委員会の経過報告や祝辞が続いた。

この後、ジャンセン教授が「坂本龍馬と二十世紀」を超えて活躍した龍馬の精神が求められ、またその象徴が海に向かって立つ龍馬

11月15日（高知夕刊）

早くも熱心なファン

高知市　龍馬記念館オープン

全国の龍馬ファンによる十億円の募金で完成した県立坂本龍馬記念館が龍馬の誕生日で命日でもある十五日、高知市浦戸にオープンした。テープカットに続いて早速、約百人のファンらが入場し、たっぷり龍馬の世界に浸った。

午前九時からテープカット。募金に当たった龍馬生誕百五十年記念事業実行委員会の沢村拓夫委員長をはじめ、中内知事、横山市長、小椋克己館長ら七人がはさみを入れると、周りで見守る関係者、一般客から祝福の拍手が起きた。

モダンな建物を見上げながら「七年間の苦労がこれで吹っ飛びました。言葉では言い表せない感激です」と沢村委員長も感慨深げ。関係者らを先頭に早速入場、じっくりと見学した。

海援隊、河田小龍、中岡慎太郎――館内は龍馬を巡る人々を軸に龍馬の思想をイメージする構成。山口県から見学に来たという龍馬ファンは「龍馬の軌跡をたどれる展示物がすばらしい」と感激していた。

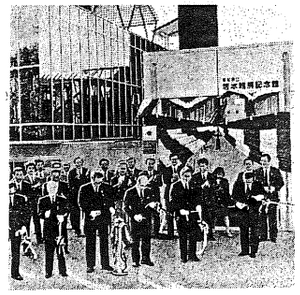
12月14日（高知）

順調なスタート

開館１カ月

1万8000人が入館

「才谷屋」模型も展示計画



した坂本龍馬記念館。当初予想を大人が観覧した

十一月十五日にオープンした坂本龍馬記念館（高知市浦戸、小椋克己館長）が十四日で開館一カ月を迎えた。これまでの入館者は一万八千人（十三日現在）を超え、当初の予想を大幅に上回る順調なスタート。館はさらに展示物の充実を図り、観光客や龍馬ファンにこたえていくとしている。

出展品に批判も

同館は龍馬生誕百五十年（昭和六十年）を機に、県内の青年団体の有志らで組織する「記念事業実行委員会」（沢村拓夫委員長）が建設に着手。募金活動を展開する一方、公開設計コンペを経て昨年四月、総事業費約十億円で着工。完成後から十三日までに二十九九十三人。当初に予想いた一カ月あたりの入八百五人が入り、館内

同事務局によると、の入館者総数は一万八

12月17日（高知）

高　知　新

〝橋本龍馬〟が断髪

高知市　記念館の完成見届け

6年半ぶり〝現代

橋本さんは高校時代から龍馬に心酔。記念館建設運動の言い出しっぺとして龍馬装束で募金活動の先頭に立ち、昭和六十年五月以来散髪を断って奮闘。そのかいあって募金は目標の十億円を達成。これをもとに先月十五日、同市浦戸に念願の記念館が完成した。

断髪式は募金運動に携わった県内十二団体の忘年会坂本龍馬記念館の建設に燃え、募金運動が始まった昭切らずに龍馬装束で通した高知市若松町、会社役員、橋に満願成就。同記念館の完成を見届けて十六日、同市の式に臨み、束ねた髪を六年半ぶりに切り落とした。

随想

ここは「龍馬への入口」です

館長　小 椋 克 己

一年近く前、龍馬記念館館長のお話を打診された時、「青天の霹靂」という言葉が浮かびました。その分野の事を考えたことは全くありませんでしたから。

それからというもの「龍馬」という言葉を見たり聞いたりする度、何とも言えぬ緊張を覚えました。勿論「龍馬」の柔軟な考えかた、先を見る見識、身分を超えた豊かな人間関係、ダイナミックな行動力、そしてタイミングの良い遊び心などには興味と憧れを持っていましたが、それとこれとは別のものだからです。

開館を迎えるに当たって、この記念館について「ロゴ」的に説明する言葉を用意しなければなりません。この館は「記念館」であり「資料館」「博物館」ではないということや、展示室の条件から「龍馬のすべて」的展示は無理であることなどから、その反対側の言葉として浮かんだのが「龍馬への入口」でした。

「非日常的な色と形、一度見たら忘れられない印象を残す」と設計者も言っているように、建物は最上級のユニークさですが、不思議とまわりに溶け込んでいます。これは「龍馬的な性格」を思わせ、色彩豊かな西面と、総ガラスで幾何学模様の東面とのコントラストは「龍馬の多面性」を見せています。また、海側にぐっと突き出している展示棟は一見不安定に見えますが、実は柱とケーブルとによってしっかりと支えられているわけで、ここには、計算され尽くした意外性がひそむ「龍馬の先見性の特長」を見ることが出来ます。このような気持で接すると、これはまさに「龍馬への入口」なのです。

展示についてもそれは言えます。展示は壁面に向かって見るのが普通ですが、この館の展示のうち龍馬を描写する情報はすべて台に載せられ上からのぞき込むようになっています。

私流の解釈ですが、これは、書店での立ち読みのスタイルだと思うのです。立ち読みは「書物への入口」であって、興味を持てばその書物を買い求め、或いはその内容を知るための行動を起こすだろう……というわけで、これも「龍馬への入口」的方式、というわけです。

そして、最後の「空白のステージ」は龍馬に最も近づくことの出来る場所です。総ガラス張りの展示室へは、見渡す限りの太平洋が惜し気もなく飛び込んで来ます。龍馬がかつて眺め、想を練ったと同じ太平洋を見、龍馬の感慨を共に感じて頂ければ、それこそが、究極の「龍馬への入口」になると思っています。

やや独善的な「入り口論」を申し上げましたが、次には「道しるべ」となることも忘れてはならない、と自戒しています。

この館に関係の深い方々の励ましの言葉。

◇龍馬研究家プリンストン大学教授、ジャンセンさん。「思想と精神を目標にした記念館は極めてユニーク、日本で初めてではないか」

◇記念事業実行委員会の澤村拓夫さん。「『県立』という名にとらわれぬ龍馬らしい運営を」

◇そして設計者の高橋晶子さん。「龍馬がそうであった様に、会うたびに新しいイメージが感じられる運営に努めてほしい」など、私たちの目標とすべきことばかりです。

そして、整備の途中にある展示や情報機能など、いろいろの課題を前に、私たちも今「龍馬になれるかどうかの入口にいる」と認識しています。

どうぞ暖かい、辛口のお声をおかけ下さい。

拝 啓　龍 馬 殿

事務　岡 林 智 子

入館者数が累計５万人を突破した龍馬記念館。「拝啓龍馬殿」と名付けられたファイルに寄せられた〝手紙〟も500通を越えました。その中から何通かをご紹介します。

○「『ほたえなやぁー』今でも声が聞こえる気がして、横浜から休暇を取って一気に来ました。」（11月15日付）

○「尊敬している龍馬殿の記念館に来て、なんか本人に会ったような気がします。」（橿原市）

○「桂浜の素晴らしい美しく広い海をまの当たりにして、あなたが世界の海を駆けめぐる海援隊を夢みた事が心の底からわかりました。」（京都市）

○「先生から教えていただいたことは計り知れない。『世界じゃき』を頭に入れて、これからもがんばりますのでヨロシク！」（別府市）

○「龍馬に関してはかなり知っていて、ビデオでの説明も結構わかるのですが、でも見ていて体が熱くなる。坂本龍馬、すごい魅力を持っている人ですね。」（東京都）

中には、こんな龍馬に縁のある方の手紙も。

○「1835年11月15日生、お誕生日おめでとうございます。1970年11月15日生、我家の双子の息子達、お誕生日おめでとう。（中略）龍馬生誕150年は息子達は15年でした。想いはいつも龍馬様に重なります。」（11月15日付、高知市）

○「ぼくはあなたとおなじ龍馬です。おとうとはしん太ろうといいます。この名前がついたわけはお父さんが中岡しん太ろうと坂本龍馬のことがすきだからです。ぼくもあなたのことがすきです。」（高松市・白井竜馬くん）

女性からはラブレターが寄せられています。

○「ステキな龍馬さんのアルバムを心にやきつけて、静かに眠っていて下さいと心に言ったことでした。（中略）こんなさみしい雨の日に会って話し明かしてみたいものです。毎年、命日にはそっとおまいりします。」（南国市）

○「りょうまさま、わたしのようちえんにきてくれませんか。（中略）いつの日かりょうまさまのような人にあえますように。きっとあえるよね。」（高知市・６歳）

まだまだご紹介したいのですが、以下は、来館者アンケートの結果を簡単にご報告します。

（調査日：12月９日(月)、１月２日～15日、他
サンプル数：500）

○住所

高知県内　61%	県外　39%

（県内）

高 知 市　53%	以外　30%	不明 12%

（県外）

近畿 29%	関東22%	四国 21%	他26%	不明 2

○年齢

学生　36%			社会人　60%					
小学生 19%	中高 11%	6	20代 19%	30代 13%	40代 10%	50代 9%	9	不明 4

その他の学生　60代以上

○記念館の存在を知った情報源

（県内）

テレビ　46%	新聞28%	14%	12%

（県外）

16%	8%	知人・親戚 51%	他19%

○見学時間

7%	20分～22%	30分～25%	40分～14%	50分～18%	11%	

20分未満　60分以上　不明 3

館内で印象的だった物は、「景色」「建物」「説明ビデオ」等、不満には「資料不足」等が挙げられました。甘口にしろ辛口にしろ、よりよい館づくりへの期待にあふれた意見ばかりでした。

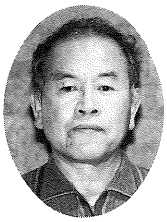
職　員　紹　介

館　長　　小椋　克己

積極的に飛び込み、人間関係を結んでいった龍馬にあやかりたいもの。11人が11色のキャラクターを活かしてお待ちします。

副館長　　森本源一郎

〝一期一会〟好きな言葉の一つ。館に勤務してその真意がわかってきたように思います。心構えとして大切にしたいものです。



学芸専門員　　下元　正清

龍馬の「海援隊」と武田鉄矢の「海援隊」を混同しているお客様に出会った時、とにかくうろたえましたよ。劇的でした。

同　上　　岡林　春雄

坂本龍馬も眺めたであろう美しい大海原を、朝な夕なに見渡しながら、毎日幸せな心で仕事をさせて頂いております。

事務補助員　　岡村　茂子

朝日にきらめく大海原、夕闇をあかね色に染めて彼方に沈む太陽、四季折々、ここ龍馬館よりの絶景を楽しんでいる毎日です。

同　上　　岡林　智子

県外に住んでいる頃、故郷の誇りとして心の片隅にいた龍馬。今や、その龍馬の中にいるような、不思議な気持ちです。

解説補助員　岡崎　　尚

慣れない仕事で、失敗の連続です。でも、ぜひ一度ご来館下さい。ハチキン娘がまっています。

同　上　　田所菜穂子

「職員(みんな)は龍馬みたいな人と結婚する！っていう人達なの？」(沈黙)でも、私の龍馬のイメージ、俳優の館ひろしさんなら。

同　上　　市川　恵子

桂浜から見る太平洋もすばらしいですが、龍馬記念館から望む太平洋が私は一番大好きです。ぜひご覧下さい。

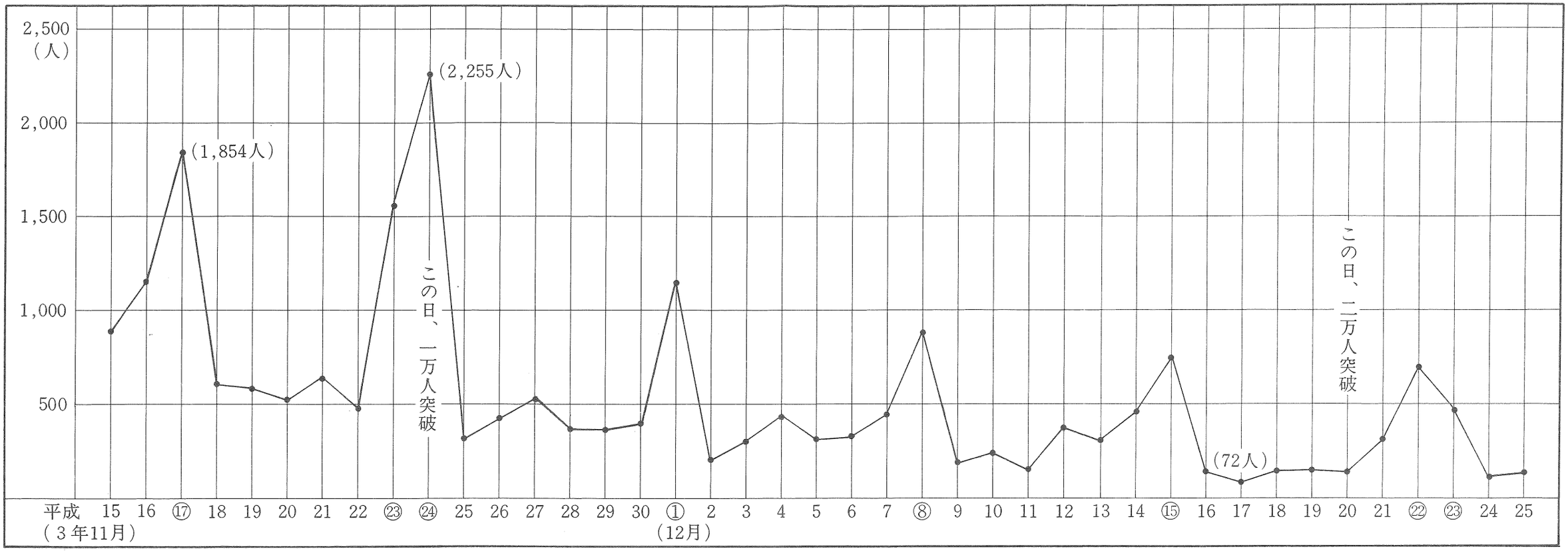
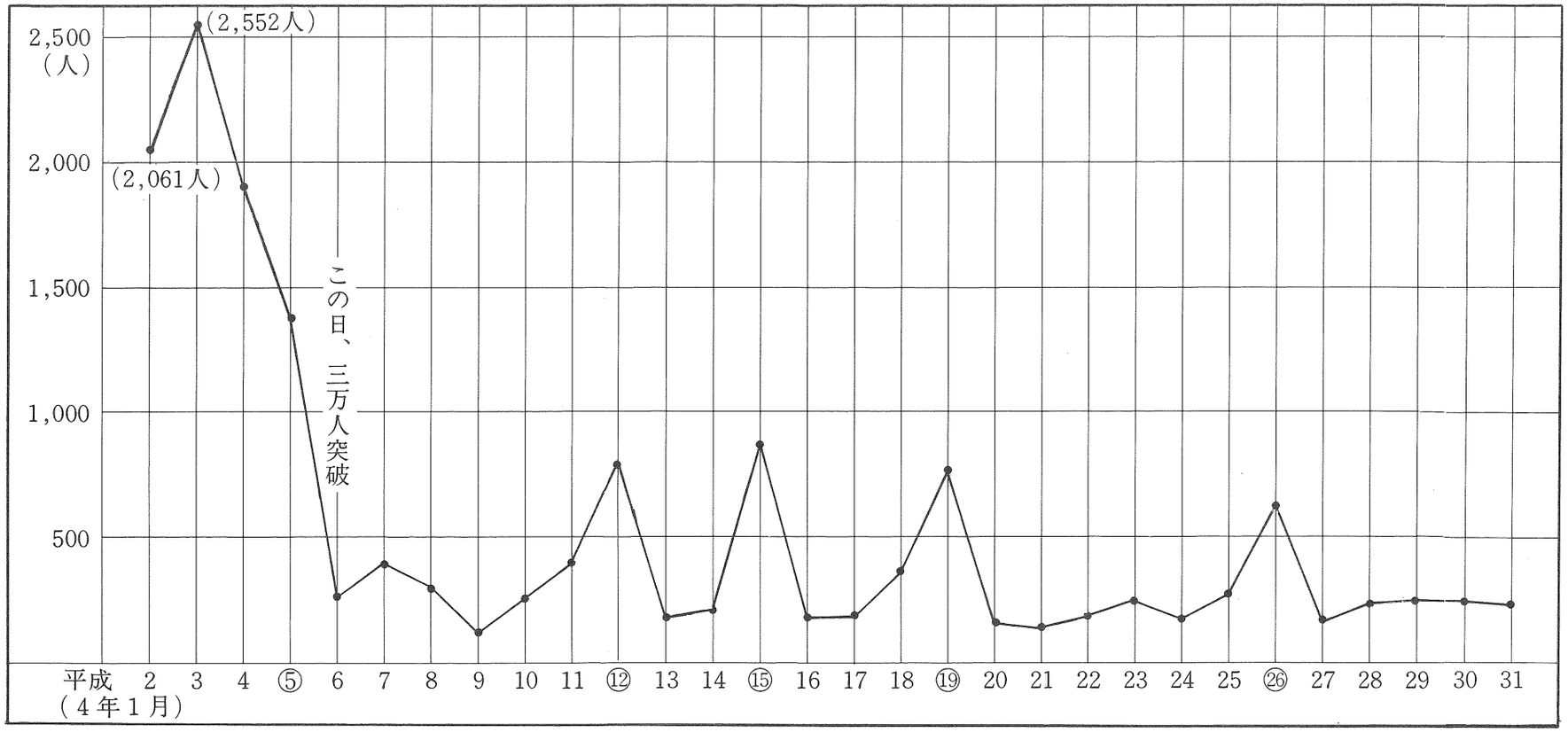
同　上　　木村　智砂

展望台から見る広大な海。とても気分がさわやかになります。皆さんにも、気分のリフレッシュ、ぜひ、おすすめします。

同　上　　藤野　祐子

龍馬ファンの多さと熱心さに驚かされる毎日です。太平洋を前に、新しい「自分の中の龍馬」を発見にぜひお越し下さい。

館だより　**“飛騰”**　創刊号
平成４年（１９９２）３月１日　発行
発行所　　高知県立坂本龍馬記念館
〒781－02　高知市浦戸城山 830
Tel（0888）41－0001

入館状況グラフ

財団法人 高知県文化財団
高知県立坂本龍馬記念館